

日本古代の都城と行幸

—「動く王」から「動かない王」への転換—

仁藤 敦史

国立歴史民俗博物館

1 平安初期における王権の変化

本報告では、日本古代における都城と行幸の連関について論じる。平安期とそれ以前とを質的に分ける政治権力構造の変化については、平安初期とりわけ桓武朝や嵯峨朝に画期を求めることができる。こうした変化を目に見える形で示しているのが天皇イメージの変化である。この変化は、支配の質の変化や在地社会の変質と連動していると考えられる。特に王権の「動く要素」からの分析をおこなうことにより、この変化はダイナミックに現象すると考えられる。天皇（大王）による遷宮・遷都・行幸という要素の変質、これが古代史のなかでどのように扱われ変化するのかを考察する。そのターニング・ポイントになるのが、嵯峨太上天皇の譲位期間を含む広義の嵯峨朝であったと考えられる。より限定的には在位期間中の弘仁年間（八一〇～八二四年）に「動」から「静」、すなわち「動く王」から「動かない王」への転換がおこると考えられる¹。こうした変化により「みやこ」に対する意識も変化するが『万葉集』と『古今集』の対比により考察が可能である。

まず第一に遷都の問題だが、一般には桓武による平安遷都により「万代宮（ヨロズヨノミヤ）」と称され、定都されたように理解されているが、鴨長明が『方丈記』で正しく指摘しているように平城上皇の変すなわち薬子の変（八一〇年）以後において平安京が実質的な「万代宮」となる。それ以降、平家による福原遷都など一時的なものを例外とすれば、明治維新まで都として動かないという状況が確認される。大同元（八〇六）年、諸臣が平城天皇に対して「歴代遷宮」するのが恒例であるが、平城天皇も遷宮をするかどうかを尋ねている²。桓武朝以降もこうした諮問が形式的とはいえなされていることは重要であり、桓武朝以降においても遷都される潜在的な可能性を有していたことが指摘できる。また実際に平城上皇は「五遷」の後に、平城宮へ移り³、そののちに「太上天皇の命に依りて、平城に遷都せんと擬す」とあるように実際に平城への遷都を宣言する⁴。薬子の変以降、嵯峨天皇が平城上皇による遷都を阻止することにより先帝（桓武天皇）が定めた平安京を実質的に「万代宮」としたことが述べられている⁵。

このように、弘仁期になってはじめて遷都が行われなくなり、「万代宮」という動かない都城が実現する「平安京定都」への流れがトレースできる。

第二に行幸であるが、行幸は律令制下において始められたものではなく、前代における大王の国見や国讃めの系譜を引き、これが律令制下に洗練された形で交通行為の頂点に位置づけられる。天皇行幸については律令段階では中国での鹵簿令のような明確な規定はなく、『延喜式』太政官

の行幸条に、鹵簿や行幸臨時官司などが規定されるのみである。しかしながら、畿外への経宿行幸は、弘仁六(八一五)年における近江への行幸を最後に以後行われなくなる⁶。現地では、国司が風俗歌舞を奏し、郡司らに賜禄を行っているなど奈良時代前半に行われた典型的な天皇行幸の形式を踏襲している。

これ以後、平安時代を通じて、大規模な行幸が途絶えてしまう。遷都と同じく原則として明治維新まで天皇は畿外に出なくなる。平安期の天皇行幸は臣下邸宅への京内行幸などに形式化・矮小化する。たとえば、幼帝清和天皇は外祖父の藤原良房の邸宅に行幸した時、種々の儀礼を行っているが、これらは奈良時代の行幸儀礼の矮小化されたものが行われている⁷。すなわち、臣下との酒宴以外に、賜禄、賦詩、天皇自身による射礼、国司が郡司を率いて百姓に耕田の礼をさせ、天皇がそれを見ることなどが行われている。本来的にはそれぞれの儀礼が固有な意味を有したが、平安期的な矮小化したかたちでの実践がなされた。

これとは対照的に太上天皇による社寺参詣が活発化する。ただし、弘仁十四(八二三)年、嵯峨荘への行幸を計画した嵯峨上皇に対して、淳和天皇は御輿や仗衛を勧めるが、上皇は辞退して、自身騎馬により前駆や兵仗のない、軽装化された鹵簿によりこれを行ったとある。規模や名称(御幸)において、天皇行幸との差別化が以後なされてくることになる⁸。

こうした天皇行幸の衰退にともない、嵯峨朝を境として支配層の行幸観自体も変化する。文徳天皇の生前の評価において、その徳を評価した部分に巡幸遊覧を好まなかったという表現があるのは、行幸のマイナスイメージが増大しつつあることを端的に示す。これは古く『日本書紀』が安閑天皇の三島行幸について、漢籍に依りながら天子が徳を示し、民をなで慈しむための行幸であると論じているのと質的な断絶を示す変化である⁹。

以上によれば、遷都をしない、行幸をしないという変化、すなわち、「動く王」から「動かない王」へという天皇イメージの変化が弘仁年間を境にして指摘できる。

2 都城制の成立過程

都城の成立過程を考える場合、その分析視角として二つの点に留意したい。『続日本紀』によれば、平城遷都の詔に都城の機能を説明するために用いられた用語として「帝皇之邑」「百官之府」がある¹⁰。前者は、天皇のみが太上天皇・皇后・皇太子などの存在に左右されることなく、超越的な権力を持つ空間となることであり、これは平安京段階において太上天皇・皇太后の居住空間たる後院が内裏から分離、および恒常的な東宮施設の内裏内への取り込みなどにより一応の到達を迎える¹¹。

一方、後者は在地性を有する豪族を都市に住む官僚として如何に組織するかという問題で、天皇にのみ奉仕する官人が、天皇との距離を表す位階秩序により、京内にその位置と規模を定められ、整然と宅地班給される空間の規制を意味する。この側面も賜姓源氏をも対象とした京貫、在地との関係を希薄化した都市貴族の発生などにより平安京段階に一応の達成を見る。このような視角を採用することにより都城制の成立過程を巨視的に見通すことが可能になると考える。

まず歴代遷宮の段階には、大王による人格的支配が強力であり、代替わりによりその支配機構が再編されなければならないという脆弱性を有したことは、律令制下の機構と大きく異なる点で

ある。こうした人格的支配や代替わりによる再編はいわゆる「倭京」「近江京」「難波京」の段階までは行われていた。天武の殯における誄の個別性や前期難波宮における十六堂に及ぶ朝堂院の巨大さを想起するならば、この段階では天皇との一対一の人格的關係が前提となって機構が運営されており、官僚機構という側面よりも重視されていたといえる。ただその前段階においても、大きなステップは存在し、第一の単なる歴代遷宮の段階から、磐余さらには飛鳥への宮の集中という段階、第二には同一地域における重層的な代替わりが行われる段階、さらには第三の単なる施設の集積から代替わりを越えて施設（漏刻や飛鳥寺の西の広場）が維持される段階という三時期が存在する。

藤原京段階においても、郡域と京域の区別、陵墓の京外への配置など浄御原令と大宝令では大きな段階差が想定され、前半期には特別行政区画としての京の成立・宅地班給・京職の整備・官衙の整備などの点において不十分であったことが指摘できる¹²。

平城京の段階では、官人の集住の面で一定の達成がみられるものの、「みやこといなかの両貫性」の問題はまだ解決されてはいなかった。この間に位置する、聖武天皇による恭仁京への遷都については、どちらかといえば聖武による個人的偶発的な問題として理解されてきた傾向がある。しかしこれも官人の集住の問題として考えることが可能である。恭仁京への遷都において、平城京の留守官に対しての詔に、五位以上の平城京への居住を禁止し、恭仁京への居住を強制している¹³。ここで注目すべきは、「平城に見在イマる者」と「自余の、他所に散在アれたる者」との区別がなされていることで、平城京段階でも都城内への集住が徹底しているわけではなかったことが確認され、さらにここではそれらを区別せずに恭仁京への移住を改めて強制している点が重要と思われる。恭仁京への遷都により官人集住の徹底を図っていることは、恭仁遷都の大きな目的であったことが想定される。

恭仁京の正式名称を「大養徳恭仁大宮」と名付け、わが国の総称としてのヤマトを宮号に冠したことは、聖武天皇の遷都に対する意欲を示すと考えられる¹⁴。

さらに長岡京段階では、副都難波京と首都平城京との統合という、複都制の止揚が試みられる。古代における複都制は首都のみの単都よりも進んだ形態ではなく、その反対に官人集住の不徹底がもたらす過渡期的な形態であり、単都への移行は、権力集中がなされる過程で克服すべき課題であったと位置づけられる。摂津職官人が在地豪族により占拠されていたことからうかがわれるように、難波京の存在は、広義の難波地域に居住した豪族層の強固な在地性への妥協であったと考えられる。副都難波京の廃止は、都城制の縮小再生産ではなく、都城制が有した固有の課題に対する積極的な対応であったと位置づけられる。

加えて、古津から大津への改名など、天智の近江京遷都を模範とする意識を前提に、天智が十分には達成できなかった大和や河内・摂津地域からの豪族層の本貫地移動を、百年後に「首都と副都の合体」による単都への移行という形で、近江に隣接する「山背遷都」という形で成し遂げたと評価される。遷都の理由に、「水陸の便」として陸運だけでなく水運が明記されていることが注目される。平城京段階よりも都市的な消費が増大したため、交易物としての米の価値が高まった。それにより重貨の運搬に適している水運に傾斜した交通路の必要性が増大したことが指摘できる。すなわち、淀川や琵琶湖の水運を重視した「山背遷都」が構想されたのである。その意味では長岡京遷都と平安京遷都という桓武朝における二つの遷都は一体として密接な関係を有して

いた。首都に瀬戸内海と通じる港湾施設たる津が設定されたのも長岡京が最初である。水害による長岡京からの撤退もこうした観点から再評価され、荘園からの貢納物により維持された中世都市京都の萌芽をこの時期に見ることができる。

平安京段階では、河内・摂津地域を中心に全国的な京貫が多く見られる。これはそれまでの官人集住政策が、権力側からの強制の側面が強かったのに対して、この段階になると自発的な申請によりなされるようになり、在地社会とは異なる都市の成熟が想定される。源氏への賜姓に対しても左京一条一坊へ貫付することが行われている¹⁵。一条一坊は平安京の内裏であり、戸主まで定める形式的な手続きとはいえるが、官人として京内に居住するという建て前が貫徹されている点は重要である。

3 古代における「ミユキ」と「行幸」

奈良時代の行幸においては、日本古来の要素である「御行」的要素と中国からもたらされた儒教的な「行幸」要素の両方が並存・葛藤していると考えられる。

まず用字の問題においても、近年大量に出土した二条大路木簡のなかには、聖武天皇による天平八（七三六）年六月の吉野行幸のために準備した用具や人夫の手配にかかわるものが存在し、「御幸行」「幸行」と表記した例がある¹⁶。おそらく、当時の訓である「ミユキ」に影響されてこのような表記がなされたもので、「行幸」という表記は天平期には安定的に用いられなかったことが確認される。こうした混乱は行幸観の変化と深い関係を有すると考えられる。

御行（ミユキ）は日本固有の観念で、国見・国讃め・狩猟・征旅などの要素を含んでいたと考えられる。全国政権化する過程で大王は在地首長層が執行していたさまざまな儀礼を服属儀礼により吸収し、以後大王が在地首長に代わって執行したが、行幸はこうした行動であったと考えられる。律令制下の公民の労役負担であった雑徭の古訓は『日本書紀』によれば「クサグサノミユキ」とあり¹⁷、行幸への奉仕役がその起源であったと考えられている。このように「ミユキ」は在地との密接な関係を維持しなければならない王という段階に対応する。一方、中国からもたらされた儒教的な観念として「行幸」的要素がある。後漢の蔡邕が書いた儒書『独断』に「車駕至る所、民臣に其徳沢を被るを以て僥倖なり」とあるように、天子が旅行において、その徳を民衆に示すことにより民衆に幸福をもたらすという考え方である。

この二つの行幸観の違いと対立を示すのが持統六（六九二）年の持統天皇と三輪朝臣高市麻呂とのあいだでおこなわれた伊勢行幸をめぐる論争である。『日本書紀』持統六年条によれば、天皇は三月三日を期して、伊勢方面へ行幸することを予告し、その準備を命じた。これに対して中納言大三輪朝臣高市麻呂は、この行幸が農事の妨げになるとして諫めた。ところが天皇は諫めにしたがわず、行幸に出発した。

この事件は、従来持統女帝の個人的な性格や好尚、これに対する高市麻呂の忠臣ぶりという対比において語られることが多かったが、事件の原因は二人の行幸観の違いに他ならない。持統が主張する行幸とは古くからの「ミユキ」的なものであり、在地との関係を国見・国讃め・狩猟・征旅などにより緊密化するのに対して、高市麻呂が主張する行幸は儒教的な行幸観が前面に出ており、天皇の旅は民衆にその徳を示し、僥倖を与えるものでなければならず、そのため農繁期を

避けるべきであるとの主張につながる。このような二つの行幸観の対立が律令制成立期に見られることは無視すべきではない。

都城と行幸の関係を民衆との交渉の側面で考えるならば、中国の都城は民衆と皇帝との接点である外朝的な空間、すなわち赦宥儀礼を行うような場が確保されているのに対して、日本の都城には天皇の超越性を示す空間が強調されているのみで、民衆と接する場が確保されていないことが特徴として指摘できる。

しかし、これは中国よりも日本のほうが君主の超越性が高いことを示すものではない。日本の場合には、天皇が民衆に接する場という外朝的な機能は、天皇行幸により果たされていたと考えられ、都城の持つ超越的な側面と行幸が持つ民衆との接点を確保する側面とが、少なくとも奈良時代においては相互補完的に機能していたと考えられる。

したがって、嵯峨朝以降に大規模な行幸が行われなくなることにより、都城の果たす役割である天皇の超越性のみが強調されることになる。これは天皇が大王から脱却し、その地位を律令制本来の理念に基づいて絶対化するのに成功したためと考えられる。

このような変化により、内裏の奥に引きこもった「見えない天皇」と都市貴族・都市民らが住む「動かない都」を中心にして畿内・畿外の境界認識は観念的に強化されるようになる¹⁸。

4 「みやこ」と「いなか」

嵯峨朝以降、平安京が遷都のない「万代宮」となることにより、みやこ＝平安京を中心とする同心円的・観念的な空間認識が強化され、みやこ＝都市、いなか＝農村の乖離が拡大した。これにより、生活空間が矮小化し、「みやこ」を「ふるさと」として生活する優越感を背景に、遠国の地名と景色を詠む名所たる歌枕が成立する¹⁹。

『古今集』における用例を検討するならば、まず「みやこ」は一般的には平安京を単に「みやこ」、平城京や菅原伏見・石上布留を「ふるきみやこ」と呼び、「ふるさと」としても位置付けている(四二・九〇・一一一・一四四・三二一・三二五・四四一・九八六番歌)。平安期における新たな意識は、「ふるさと」が旧都平城京のある大和国だけでなく、京周辺の「桂」「深草」「宇治山」にも意識されるようになり(九六八・九七一・九八三番歌)、京外に身を引く隠棲する場所として位置付けられていることである。「須磨」も同様であり(九六二番歌)、『源氏物語』における「平安京」と「宇治」「須磨」「明石」のイメージの対比に通じることは留意される。「平安京」は、京郊外の「み山」にある「松葉」「柳」「秋の錦」との対比で「若葉」「桜」「春の錦」など明るいイメージで詠まれるようになり(一九・五六番歌)、さらには平安京＝「みやこ」の優越性を畿外の「みかの原」「唐琴」「甲斐」「筑紫」などとの対比で語られるようになる。「みやこまで聞こえる名声」「諸国になかなか出かけられない都人」「昔住んだなつかしい京の都」などの表現によりみやこを諸国よりも優れた住みやすい「ふるさと」として位置付けるようになっていく点は『万葉集』段階との大きな相違である。『万葉集』段階に類出した「ひな」の用例が激減することも大きな変化である(隠岐国を「ひな」と呼ぶ九六一番歌の事例が唯一か)。桓武朝以降、三関は廃止されたが、軍事のかつ物理的障害から、固関儀の存続に典型的なように観念的な境界として機能するようになり、実質的には大索・四塚祭などでは京・山城国境が重視される

ようになった。さらに寛平期の支配層に対する居住移動規制法令により畿内と畿外の差別化や移動の自由が制限されたため、都市貴族の生活空間が平安京とその周辺に限定され、京を中心とする同心円的な閉じた空間が意識されるようになった。そのため「みやこ」と「いなか」が乖離し、「みちのく」のような遠国の地名と景色を京内で観念的に理想化して詠む名所たる「歌枕」が成立する。『伊勢物語』の「東下り」のモチーフはまさにこうした段階の産物である。

平安期になると、平安京段階の自発的な京貫により都市貴族化が進行し、流通経済の発展にともない京内の住居が住みやすい場所となることにより、京内が貴族の故郷となると考えられる。「里内裏」という用語に示されるように、平安京内での里意識が形成されることとなる。『伊勢物語』第一段では奈良の京が「ふる里」とされ、『方丈記』では福原遷都時の古京(京都)が「ふるさと」と表現される。一方、「ひな」の用字は「夷」から「鄙」に変化し、その内容も「みやび」=都風に対する「ひなび」=田舎風のように、「いなか」と類似的なものになる。『伊勢物語』五十八段には「みやこ」であった長岡京が「いなか」として表現された描写がある。そこには田を刈っているという農村的景観が「いなか」と位置付けられている。「みやこ」と「いなか」は遷都により互換されうるものと考えられる。「ひな」が「みやこ」にならないことは大きな相違である。平安時代以後は支配の均質化により「ひな」が喪失し、平安定都や豪族層の都市貴族化により「みやこ」自体が「ふるさと」化する。その結果、現在にまで残る「みやこ」(都市)と「いなか」(農村)の二元的構造に変化していくことになる。

(註)

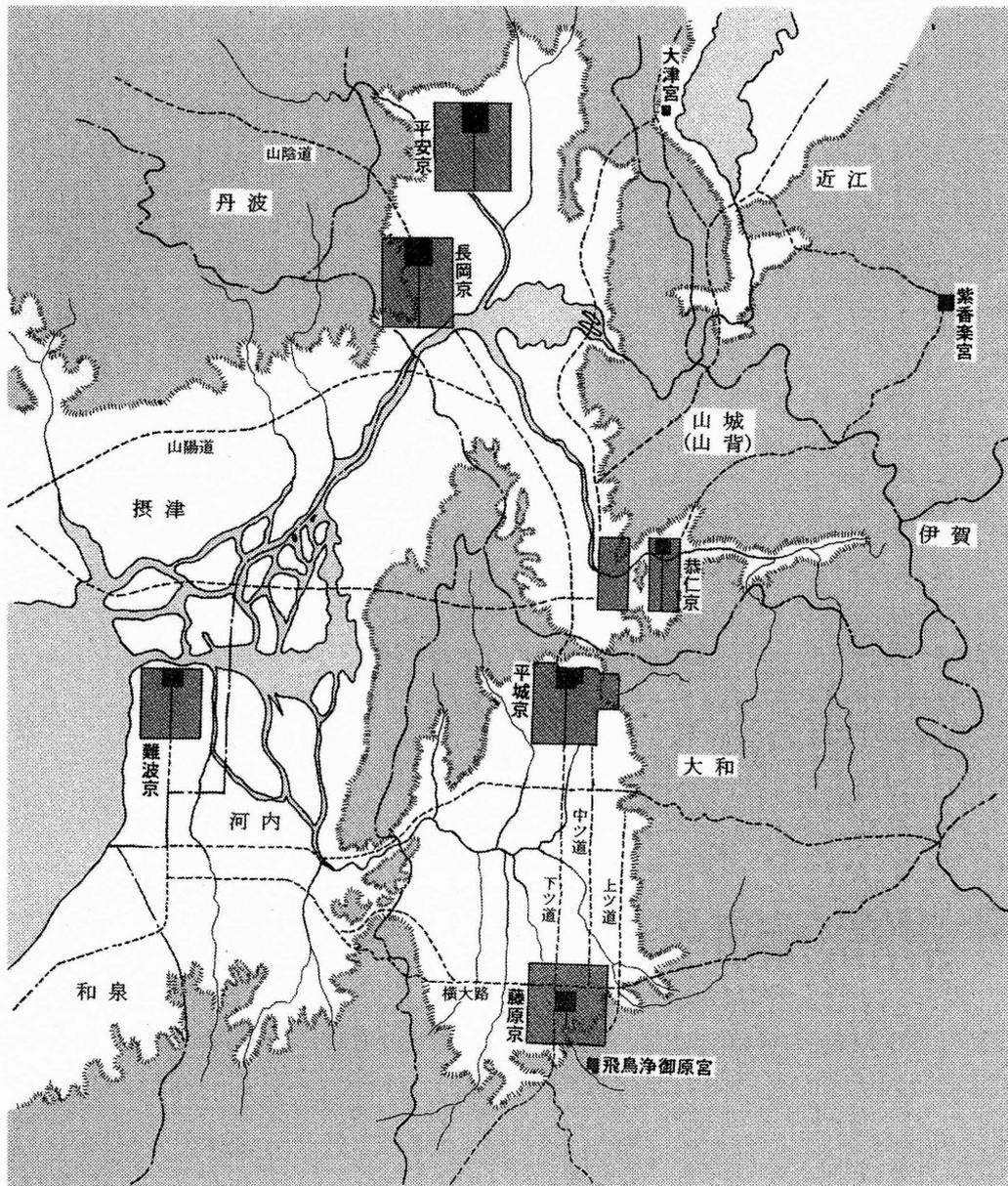
- 1 仁藤敦史「古代国家における都城と行幸－「動く王」から「動かない王」への変質－」(『古代王権と都城』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九〇年)。
- 2 『日本後紀』大同元年七月甲辰条。
- 3 『日本後紀』大同四年四月戊寅条。
- 4 『日本後紀』弘仁四年九月癸卯条。
- 5 『日本後紀』弘仁元年九月丁未条。
- 6 『日本後紀』弘仁六年四月癸亥条。
- 7 『日本三代実録』貞観六年二月二十五日条。
- 8 『類聚国史』太上天皇行幸、弘仁十四年九月癸亥条。
- 9 『日本書紀』元年閏十二月壬午条。
- 10 『続日本紀』和銅元年二月戊寅条。
- 11 仁藤敦史「太上天皇制の展開」(『古代王権と官僚制』臨川書店、二〇〇〇年、初出一九九六年)。
- 12 仁藤敦史「倭京から藤原京へ－律令国家と都城制－」(『古代王権と都城』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九二年)、同「藤原京の京城と条坊」(『日本歴史』六一九、一九九九年)、同「首都平城京」(広瀬和雄・小路田泰直編『古代王権の空間支配』青木書店、二〇〇二年)、同「古代の行幸と離宮」(『条里制・古代都市研究』一九、二〇〇三年)、同「藤原京と官員令別記」(『季刊明日香風』一〇〇、二〇〇六年)など。
- 13 『続日本紀』天平十三年閏三月乙丑条。
- 14 『続日本紀』天平十三年十一月戊辰条。
- 15 『類聚符宣抄』皇子賜姓、延喜二十一年二月五日太政官符。
- 16 仁藤敦史「行幸観の変遷」(『古代王権と官僚制』臨川書店、二〇〇〇年、初出一九九一年)。なお、奈良県教育委員会『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』本文編(一九九五

年), 四二六頁には「二条大路木簡にみえる芳野行幸関係木簡一覧」があり, 「幸行」を「みゆき」と読んだかとする。

¹⁷ 『日本書紀』持統六年五月庚午条・八年三月己亥条。

¹⁸ 仁藤敦史「初期平安京の史的意義」(『古代王権と都城』吉川弘文館, 一九九八年, 初出一九九四年)。

¹⁹ 仁藤敦史「古代王権と文芸」(国立歴史民俗博物館編『和歌と貴族の世界』塙書房, 二〇〇七年)。



古代都城位置図

図の出典

奈良文化財研究所『日中古代都城図録』2002年, 10頁より

Capital Cities and Imperial Excursions in Ancient Japan: The Transition from “a Monarch Who Moves” to “a Monarch Who Does Not Move”

NITŌ Atsushi

National Museum of Japanese History

In this presentation I will examine the connections between capital cities and imperial excursions in ancient Japan, giving consideration to changes in the nature of the elements that entered into emperors' (powerful kings') relocations of their capitals and their movements outside their own places of residence. The turning point in ancient history was the era of Emperor Saga, including the time after he relinquished the throne. We can point to the Kōnin era (810-824) as the temporal boundary after which the capital was not relocated and the emperor did not travel outside the capital, that is, the time when the image of the emperor changed from “a monarch who moves” to “a monarch who does not move.”

In functional terms, there were two important elements of an ancient capital city: it was the emperor's town and it was the government officials' town. With respect to the former, it was not a space in which the emperor was moved by the presence of figures such as the retired emperor, the empress, and the crown prince, but rather it was a space in which the emperor alone had transcendent power. As for the latter, it was organized as the city in which administrators—the bureaucrats who governed the powerful families who have their roots in the countryside—dwelled. The reign of Saga was the historical moment when these two functions reached a fully developed state, although that would prove to be temporary.

If we think of the relationship between capital cities and imperial excursions as an aspect of the negotiations between the rulers and the ordinary people, the capital cities of China were spaces where, in palaces or at court, the common people and the emperor came into contact with each other; they were places where pardons were granted and rites were conducted. In Japan, by contrast, the emphasis was all on the capital city being the space that revealed the transcendence of the emperor; the capital was not a place where the emperor made contact with the common people. Consequently, after the reign of Saga, large-scale excursions outside the capital ceased, and all the stress was put on the transcendence of the emperor, whose role was played within that city.

Conceptually, a sense of separation emerged and grew strong through this kind of transformation, a divide between the Kinai district centered on the “unmoving capital” in which the urban aristocrats and common folk lived and the “invisible emperor” was confined within the inner quarters of the palace, on the one hand, and everything outside the Kinai district, on the other. After Saga's reign, Heiankyō became “the capital for all the ages” that would never be relocated. Because of this, the sense of space that equated “capital” with Heiankyō and conceived it as being at the center of concentric rings grew stronger, and the separation widened between the capital (equated with the city) and the country (equated with agricultural villages).